

## 中部日本深部地殻構造探査と新しい地殻変動論

## Seismic expeditions of the deep crustal structures in Chubu, Japan, and new research scope of the crustal movements

# 伊藤 谷生 [1]

# Tanio Ito[1]

[1] 千葉大・理・地球科学

[1] Dept. Earth Sciences, Fac. Sci., Chiba Univ.

昨年(2008年)の連合大会の本セッションにおいて、狩野謙一は、活断層の密集域である中部日本のテクトニクスは、糸静線をプレート境界としてそこにおける東西圧縮という従来支配的であった地殻構造観では解くことができないと明快に指摘した。それに変わるべき新たな地殻変動論を構築するためには、均質な地殻構造を有する更地に対してある境界条件を与えて地殻変動を考察するという単純な方法から脱却しなければならない。すなわち、第1に、長い地質学的時間を経て形成された地殻構造全体を解明する作業が前提とされる必要がある。特に、西南日本から続く帯状構造(その基本は Ito et al. (2009) によって明らかにされている)は伊豆弧の衝突によって大きく北に屈曲されており、地殻全体が大規模に改変されていると見なければならない。この改変が現在の活構造と地殻変動にどのように関与しているかがまず解かれなければならない。第2に、境界条件としてフィリピン海プレート沈み込み境界だけでは決定的に不十分であり、中部日本下に存在するプレート上面の形状とその運動方向が設定されなければならない。というのは、フィリピン海プレート上面は近畿トライアングル(Huzita, 1962)の東辺=敦賀湾 伊勢湾構造線(桑原, 1968)下で北西-南東方向のヒンジをもつ背斜状構造をしており(弘瀬他, 2008)、琵琶湖東方下ではプレート正面が直接中部日本下部地殻に接している可能性が高いからである。こうした見地から地殻変動論の新たなブレークスルーを目指して中部日本深部地殻構造探査グループが千葉大学、静岡大学、岐阜大学、信州大学、東京大学等を中核として組織され、2008年度から長大測線による構造探査を開始した。2008年度は、南部フォッサにマグナに始まり、南-中央アルプスを超え木祖村に至る測線で実行され、現在までの解析結果は村田によって本大会で報告される(S153)。2009年度は敦賀湾 伊勢湾構造線をターゲットする探査が準備されている。本報告においては既に得られている成果を踏まえつつ、新しい地殻変動論を議論する。